

はまぎくのつぼみ活動全史

～宮古市との10年間の軌跡～

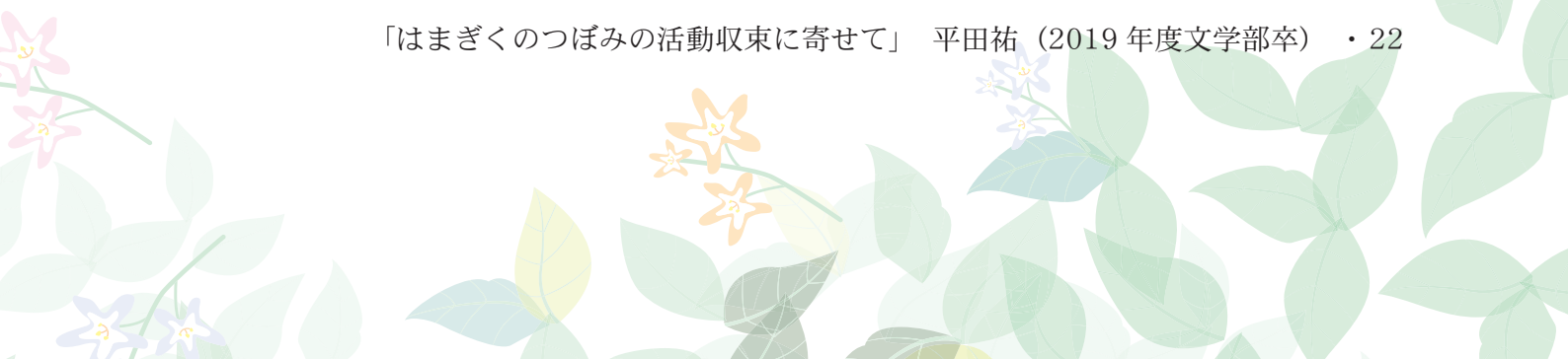


中央大学ボランティアセンター公認学生団体
「はまぎくのつぼみ」

2022年2月

目次

はじめに	1
第1章 はまぎくのはまぎく	
1、団体の概要・年表	2
2、団体の理念と目的	4
①団体理念 ②目的 ③団体創立の背景 ④団体名の由来	
本章担当者より 布川理央 門井理子	5
第2章 災害時と現在の宮古市について	6
本章担当者より 森岡咲姫子 内山晴太	12
第3章 各期の活動内容	
第1期 「想いをつなぐということ」	
中村（石山）英美子（2013年度文学部卒）	13
第2期 「活動報告」	
佐藤耕太（2017年度法学部卒）	14
第3期 「はまぎくのはまぎくでの活動を振り返って」	
吉田沙織（2017年度法学部卒）	15
第4期 「はまぎくのはまぎくは個々人の中に生き続ける」	
田中瑠海（2018年度商学部卒）	16
第5期 「支え合うこと」	
今野陽介（2019年度総合政策学部卒）	17
第6期 「はまぎくのはまぎくの活動を通して」	
山本高大（2020年度文学部卒）	18
第7期 「はまぎくのはまぎくで得られた経験」	
榎本由波（商学部経営学科4年）	19
第8期 「コロナ禍での活動」	
大内尚人（商学部会計学科3年）	20
有志 「震災を伝え続けることの大切さ」 大上拓紘（2016年度経済学部卒）	21
「はまぎくのはまぎくの活動収束に寄せて」 平田祐（2019年度文学部卒）	22



第4章 宮古市の方より

黒柳茂雄さん（元宮古市社会福祉協議会職員）	23
中沢果美さん（宮古市社会福祉協議会職員）	24
若江美伊さん（津軽石公営住宅管理人）	26
盛合光成さん（元宮古市役所職員）	27
早川輝さん（NPO 法人みやっこベース）	30

第5章 収束と今後

1、収束について	32
2、今後について	32

第7期および本章担当者より

小林俊郎、中野数章、吉田圭佑、中村有里、菱田朱衣梨、鈴木海渡、
三浦航侑、松尾進司、松本奈子、本多裕香

第6章 先生方より

「逆境に立ち向かった「はまぎく」への感謝

小室夕里（法学部教授・はまぎくのつぼみ顧問）	37
「つながりを切らさず」 吉野朋美（文学部教授・はまぎくのつぼみ顧問）	37
「ミーティングの思い出」 山科満（文学部教授・はまぎくのつぼみ顧問）	38
「これからも逆境に強いはまぎくのように…」	
開澤裕美（ボランティアセンター コーディネーター）	39

第7章 宮古について

1、宮古マップ	40
2、企業・商品紹介	
古須賀商店（荳わかめの生姜漬け）	43
津田時計写真店	43
ホテル近江屋	44
かけあしの会（塩麴クッキー）	44
共和水産	45
フードパック（たつと浜だれ）	45
Art Eriy's（クリアファイル）	45
花坂印刷	46
田中菓子舗（田老かりんとう）	46
有限会社すがた（まごいかせんべい・いかせんべい）	47

3、参考資料

メディア掲載情報、宮古市からの感謝状	48
本章担当者より 小玉竜大、飯塚健美	49
終章 終わりに	50

はじめに

このたび、はまぎくのつぼみの活動誌を作成する運びとなりました。

本誌の作成にあたり、ご協力いただきました宮古市の皆様、先生方、中央大学ボランティアセンターの皆様、卒業生の先輩方、この場をお借りして感謝申し上げます。お忙しい中、執筆の依頼を快く引き受けて下さったこと、また作成にあたりご尽力いただいたことは感謝してもしきれません。このように私たちの活動を理解し、温かく見守り応援して下さる皆様と出会えましたことを幸せに感じております。

はまぎくのつぼみは2011年の東日本大震災を機に発足し、2012年より岩手県宮古市を中心として活動を続けてまいりました。夏や冬、春の長期休暇では宮古市を訪問して公民館や学童・企業での活動を行い、また、東京では物産展を行って活動で得た情報を周知するなど、多くの方の協力のもと様々な活動を続けて参りました。しかしながら、2021年度を持ちまして団体としての活動を収束する運びとなりました。およそ2年前から学生団体としての活動内容について見直す時期を考え、話し合いを続けてまいりました。私たちの団体理念「つながりの創造」・「継続的支援」から活動を継続すべきだという意見もありましたが、災害復興支援団体として現状に見合った役割を果たすことが難しく感じられるようになってきたこともあり、団体としての活動の収束を決意致しました。

そのような中、私たちが続けてきた活動を記録したいという考えに至り、本誌の作成を行いました。宮古市の方々との繋がりや、先輩方から私たちに至るまでの活動や築き上げてきたものを、本誌によって多くの方にお知らせできたらと考えております。また本誌が他の災害支援復興団体や学生団体の活動において、多少なりともお役に立てれば幸いです。

中央大学ボランティアセンター公認学生団体 「はまぎくのつぼみ」 一同

第1章 はまぎくのつぼみ

1、団体の概要・年表

最初に、団体の基本情報や活動内容について説明させていただきます。

はまぎくのつぼみは、岩手県宮古市と東京都内にて活動してきました。具体的には、大学の学期中は週に1～2回、昼休みにミーティングを行い、長期休暇中は宮古市を訪問する現地活動を展開し、また、その他物産展などの各種イベントに参加してまいりました。現地活動では、仮設住宅や公民館での交流を通じたコミュニティ形成支援や、学童での交流、田老地区「学ぶ防災」ツアーへの参加、宮古市にある企業様への訪問などをさせていただきました。東京での物産展は、イオンモール多摩平の森や中央大学多摩キャンパス生協、中央大学白門祭、中央大学ホームカミングデー、そして八王子生活実習所主催のわたぼうし祭へ、宮古の商品を多数出品させていただきました。加えてFacebook、Twitter、InstagramなどのSNS活動も行い、物産展の告知や宮古の魅力発信に努めました。詳しくは年表の方にまとめております。そちらもご覧いただければと思います。

2012年度、学童での交流



はまぎくのつばみ活動年表

年	月	活動内容
2012	5	団体発足
	12	被災地支援活動を開始 荷竹の仮設住宅や鍬ヶ崎学童を訪問し交流
2013	4	学生課に設立されたボランティアステーションに所属
2014	4	ボランティアステーションがボランティアセンターに改称され、ボランティアセンター公認学生団体になる
	11	中央大学生協物産展への参加を開始
2015	4	荷竹仮設住宅の解体開始
2016	2	イオン物産展への参加を開始
	8	津軽石地区公営住宅での交流会を開始
	9	わたぼうし祭への参加を開始
	10	ホームカミングデーへの参加を開始
	8	企業訪問活動を開始
2019	1	宮古企業とのコラボ企画「みやこラボ」を開始
2020	3	今後の団体の方向性、活動などについて議論
2022	2	活動誌発行
2022	3	活動終了予定



2012年度、荷竹仮設住宅での交流



田老地区「学ぶ防災」ツアーにて撮影

2、団体の理念と目的

①団体理念

はまぎくのはまぎくは、「つながりの創造」「継続的支援」の二つを理念として設立されました。「つながりの創造」では、人と人とのつながりを第一に考えること、また、「継続的支援」では、支援でできたつながりを絶やさないように努めること、が表現されています。

②目的

このような団体理念に基づき、宮古市におけるコミュニティ形成支援を目的とした活動をさせていただきました。また、継続的支援の観点から、年に2回宮古市での活動を行い、宮古市をより多くの方に知っていただけるようにと、東京での物産展活動、SNS活動を行ってまいりました。

③団体創立の背景

震災直後は有志のメンバーで宮古市へ復興に向けたお手伝いをしに行くという形でしたが、2012年に団体化、その後中央大学ボランティアセンターに所属し、今に至ります。

④団体名の由来

「はまぎく」は、宮古市の市の花で、「逆境に立ち向かう」という花言葉を持っています。東日本大震災以前も何度も地震や津波の被害を受けてきた宮古市ですが、その度に復旧、復興を遂げてきました。そんな宮古市を象徴する花であることから、団体名にも入れられました。

また、「つぼみ」は、学生一人一人の主体的な活動を表し、学生の活動が宮古市の復興につながり、いつの日か満開のはまぎくが咲くことを願って名づけられました。

本章担当者より



法学部3年 布川 理央

はまぎくのつぼみが活動を続けてこられたのは、受け入れて下さる宮古の方々や、ボランティアセンターの職員の皆さま、中央大学のOB・OGの皆さまなど、多くの方のご支援やご尽力があったからだと思います。また、私たち8期生が3年間活動できたのは、今までバトンを受け継いでくださった先輩方のおかげです。改めて、感謝申し上げます。ボランティア活動を通して、学生だからこそできることは何か、同期と協同することの楽しさ難

しさを考えることができ、私自身の成長の機会にさせていただきました。学生時代ならではの、貴重な経験を積ませていただいたと思います。活動中にお聞きしたお話やはまぎくのメンバーとして過ごした時間は、一生忘れません。時節柄、宮古を訪問するのが難しくなり、お会いできないままに団体を収束することとなってしまいましたが、状況が落ち着けばまた宮古へ行きたいです。皆さま、どうか健康にお過ごしください。



文学部3年 門井 理子

はまぎくのつぼみに所属して多くを学ぶことができました。1度しか宮古市を訪れての活動はできませんでしたが、現地で直接学んだことや肌で感じたことは私の大切な財産となりました。企業訪問やお祭りのお手伝いでは、現地の方が温かく迎えて下さり嬉しかったです。自分に求められていることを考え、行動するのは難しいことでしたが、困っている時には優しく声を掛けて頂き、ご指導いただけたことは本当にありがたかったです。実際に自分が役に立ち、何かをすることができたのかは自信がありません。しかし少しでもお力になることができているなら嬉しく思います。



団体としては収束という運びになりましたが、これからは個人的に旅行に訪れたりして宮古市と繋がっていければと思います。

第 2 章 災害時と現在の宮古市について

この章では、宮古市について過去と現在 2 つの観点から執筆しております。
また、この章（6 ページから 12 ページ）では一部震災当時の写真を使用しております。

本章参考文献

- ・岩手県宮古市 宮古市危機管理課「東日本大震災に伴う対応状況」2012 年 11 月 6 日
https://www.city.miyako.iwate.jp/data/open/cnt/3/2874/1/shinsai_taiojokyo.pdf
- ・「いわて震災津波アーカイブ～希望～」特選写真展～震災忘れまじ～ 空から見る被災前・後の三陸のまち
<http://iwate-archive.pref.iwate.jp/tokusen/machi/>
- ・岩手県宮古市記録写真その 1 2012 年 11 月 6 日
https://www.city.miyako.iwate.jp/kikaku/koho/higashinihondaishinsai_miyako-shi-no-kiroku/kirokuphoto_1.html
- ・岩手県宮古市 HP 東日本大震災宮古市の記録 第 2 巻上・下 PDF ダウンロードページ
2017 年 10 月 30 日
https://www.city.miyako.iwate.jp/kikaku/koho/higashinihondaishinsai_miyako-shi-no-kiroku/download_PDF_earthquake_tsunami_record_2.html
- ・岩手県宮古市 HP 復興状況（パンフレット）ダウンロードページ
『東日本大震災からの復興 令和 2 年 3 月版』 2020 年 4 月 10 日
https://www.city.miyako.iwate.jp/kikaku/hukkou/fukko_suishin_2.html

宮古市の基本情報

人口（2022年1月1日現在） 49,274人

面積 1,259.15 km²

宮古市全体の被害状況

・住宅等被害

全壊	大規模半壊	半壊	一部損壊	合計
5,968 棟 (65.7%)	1,335 棟 (14.7%)	1,174 棟 (12.9%)	611 棟 (6.7%)	9,088 棟

・人的被害

死者	行方不明者
517人	94人

(2012/11/6 岩手県宮古市 HP 「東日本大震災に伴う対応状況」より)

津波の被害

田老地区では9割近くが壊滅状態



震災前



震災後

皆さまの証言 (2019 年夏活動より)

45 分間静かな時間が流れ、たった 4 分で浸水してしまった

「10mの防潮堤が2つもあるから大丈夫だろう」
という判断ミスをしてしまったのかもしれない

逃げれば助かった街 (田老地区)

災害に対しては臆病な方が良い

たろう観光ホテル



(2019 年夏活動より)



市役所前交差点

市役所 1 階ロビー



「いわて震災津波アーカイブ 希望」より

防災に関して覚えていて欲しいこと (2018 年夏活動より)



(2019 年夏活動より)

誰か一人でも呼びかける

その際自分の命は優先して判断をする

早い人を先頭にして逃げる

偏見はしてはいけない

最悪のことを考えることが必要

研究者の言うことや考えを信じすぎない

(「海拔 60 m くらいあると安心して暮らすことが出来る」など

震災後の皆さまの地元宮古市への想い（2019年夏活動・2020年春活動より）

何もかも流されて辛かった

戻りたくなかったけど鯨ヶ崎が好きで戻ってきた（鯨ヶ崎住民の方）

自分たちで先回りして地元の方を救いたい

地元を盛り上げたい（企業の方）

ここには都会にないものがある

人のつながりもある

地域貢献を早くしたい（企業の方）



（2019年夏活動より）

震災後に励みになったのは一人ひとりの言葉

「自分の子どもや孫たちのために店を再開してね」というお客さまの言葉（企業の方）



宮古湾 50mの巨大こいのぼり



鯨ヶ崎小学校の桜
（広報みやこ 平成23年6月1日号より）

宮古市の位置 出典：Mapion 都道府県地図



宮古市の詳細図 出典：岩手県宮古市周辺の地図 - Yahoo! 地図



宮古市震災関係年表（一部抜粋）

年月日	内容	出典	
2011年	3月11日	東日本大震災の発生	
	3月13日	社会福祉協議会がボランティアセンター開設	東日本大震災宮古市の記録第2巻（下） 第8章ボランティア活動とその課題
	3月25日	仮設住宅工事に着手	東日本大震災からの復興
	5月15日	グリーンピア三陸みやこ内に共同仮設店舗「たろちゃんテント」がオープン	同上
	5月15日	仮設住宅の入所開始	東日本大震災からの復興
	7月16日	浄土ヶ浜遊覧船が営業再開	同上
	7月25日	仮設住宅が全て完成（62か所、2010戸）	同上
	8月10日	指定避難所が全て閉鎖（最大85か所、8889人が避難）	同上
	9月25日	グリーンピア三陸みやこ内に「たろちゃんハウス」がオープン	同上
2012年	3月11日	東日本大震災一周年追悼式	同上
	4月	震災がれきの仮設焼却炉が稼働	同上
	7月21日	浄土ヶ浜レストハウスが再開	同上
2013年	3月11日	東日本大震災二周年追悼式	東日本大震災からの復興
	7月6日	「シートピアなあと」が復旧し再開	同上
2014年	1月15日	災害公営住宅の入居者募集を開始	同上
	3月11日	東日本大震災三周年追悼式	同上
	3月31日	災害廃棄物の処理が完了	同上
	5月9日	リアスハーバー宮古が復旧し再開	同上
2015年	3月11日	東日本大震災四周年追悼式	同上
2016年	3月11日	東日本大震災五周年追悼式	同上
	4月1日	たろう観光ホテルの一般公開が開始	同上
	8月30日	台風10号による被害	同上
2017年	3月11日	東日本大震災六周年追悼式	同上
2018年	3月11日	東日本大震災七周年追悼式	同上
	10月1日	イーストびあみやこがオープン	同上
2019年	3月11日	東日本大震災八周年追悼式	同上
	3月23日	JR山田線宮古―釜石間が開通	同上
	6月22日	三陸沿岸道路が全線開通	同上
	10月12日	台風19号による被害	同上
2020年	3月11日	東日本大震災九周年追悼式	同上
2021年	3月11日	東日本大震災十周年追悼式	同上

本章担当者より

法学部 3年 森岡 咲姫子

私が実際に宮古市を訪問出来たのはたった二回でした。ですが、宮古市の景色や美味しい食べ物、皆様の優しさは一年半訪問することが出来なくても記憶に強く残っています。特に、公民館活動にて頂いた「名前は忘れても、顔は覚えているからまた来てね」というお言葉は心に残っています。津波を経験しておらず、どんなに頑張っても被災された皆様のお気持ちに100%寄り添うことは出来ないことの難しさを感じていた自分にとって、少しでも喜んでくださったことがとても嬉しかったことを覚えています。



最後になりますが、宮古市での経験は何ものにも代え難い糧となりました。本当に有難うございました。状況が落ち着き次第、また宮古市を訪問することを楽しみにしています。



法学部 3年 内山 晴太

大学1年の夏、初めて訪れた宮古市の美しさ与人々の温かさを実感して、私は宮古市を好きになりました。そしてはまぎくのつぼみ8期の副代表となり、ミーティングの進行や連絡等、様々なことを経験しました。はまぎくのつぼみは議論の結果、収束という結論にはなりましたが、今後もできる限り宮古市を訪れたいと思っています。



最後になりますが、活動を温かく迎え入れてくれた宮古市の皆様、そして中央大学ボランティアセンターの皆様、ありがとうございました。

第3章 各期の活動内容

第1期 想いをつなぐということ

2013年度文学部卒 中村（石山）英美子

「自分にできることを自分の力でやってみたい」

そんなわたしの些細な想いから、はまぎくのつぼみは誕生しました。

2012年春に、小室先生、当時の学生課の職員さんを通じて、中大OBの方より「学生に来てほしい」という宮古市の人の声を届けていただいたことがきっかけです。

なにもかもが手探りだったあの時代を経て、多くの後輩の皆さんの想いがつながり、今ここでこのように活動収束に当たって筆を執ることができ、大変光栄に感じております。



当時の活動内容

創設当初は、団体名・活動理念の決定から、現地のニーズ調査、活動計画の企画・作成など、とにかくできること、やれることを1つ1つ確実に積み上げていきました。

何が進むべき方向で、正しいのか誤っているのか、迷うことも多々ありましたが、少人数ながらも運営メンバーと力を合わせ、小室先生や学生課の職員さん、宮古市社会福祉協議会様に多大なるご尽力をいただきながら、少しずつ活動を形作っていきました。そこから何度も話し合い、活動を続けるうちに、団体としての主な活動として、「学童クラブの訪問」・「仮設住宅支援」の2つを定着させることができました。その他にも、宮古で復興に奮闘なさっているOBの方のお話を伺ったり、他団体に声をかけてもらい、大学生協で物産展を開催したりするなど、のちに後輩の皆様が引き継いでくれた活動の基盤作りも行っていました。

活動当時のところ模様

混沌とした世の中で、慣れないことも多い中でしたが、冒頭の「自分にできることを自分の力でやってみたい」という思いを何よりも大事にしていました。半面、自分の力を過信しており、できないことの壁に当たると、すぐに憂いていたように振り返ります。思いだけが走って、うまくいかないことも数知れずありましたが、その度に感じていたのは、人の温かさでした。同じ思いをもって集う仲間、支援してくださる大人の方々、そしてなにより宮古に住む皆様の親身な想いに支えられて、卒業までの2年間の活動を遂げることができたように感じています。

いま思うこと

9年前、わたしの小さな想いから始まったこのはまぎくのつぼみが、まさかここまで代々と受け継がれるような、想いのつまった団体になるとは想像もしていませんでした。当時から今までずっと支え続けてくださっている先生方、ボランティアセンター、学生課（現・学生生活課）の皆様には、本当に感謝の気持ちでいっぱいです。僭越ながら、これまではまぎくのつぼみに関わってくれた後輩の皆さんには、「逆境に立ち向かう」という団体名に込めた想いを胸に刻んで、これからの人生を歩んでいってほしいと思います。本当にありがとうございました。

第2期 活動報告

2017年度法学部卒 佐藤 耕太



はまぎくのつぼみに入ったきっかけと当時の活動内容

私は20年以上東京の八王子で育ちましたが、岩手県にもルーツがありました。母親の実家が岩手県花巻市にあり、私は母の里帰り出産により花巻市で生まれました。毎年夏には花巻に遊びに行けることをすごく楽しみにしていたことを覚えています。

東日本大震災が起きたのは高校3年生になる直前でした。当時は受験を控えたタイミングでしたのですぐに被災地に行くことは断念しましたが、将来何らかの形で絶対に支援をしたいと思っていました。中大に入学した当時、5つの被災地支援団体がありましたが、やはり岩手にある宮古市で活動するはまぎくのつぼみに入りました。当時の活動内容は現地学童での学習支援、仮設住宅で住居者の方々との交流、田老地区でのフィールドワーク、岩手県沿岸地域の特産品を扱った物産展などでした。

当時感じたこと

はまぎくのつぼみの活動が本当に現地の方々の役に立っているのか、自分たちの自己満足になっていないか思い悩むことが多々ありました。学生の経済事情的に現地には年2回、多くても3回しか行けていませんでした。学童の生徒たちや仮設住宅の方々とは年に数回しか会っていませんでしたので、逆に現地の方々の負担になってしまっていないか心配でした。

そんな葛藤の中でも、震災が風化しないよう人々の目を宮古に向けることを被災した方々の経験から学ばせていただき、次回震災が起きた際にそれを生かせる人を少しでも増やすことを意識していました。一例として、はまぎくのメンバー以外の中大生にも田老でのフィールドワークに参加してもらい、語り部さんの話や遺構を実際に見聞きし経験として持ち帰ってもらうようにしました。

今感じること

東日本大震災に限らず、学生はボランティア活動を通して学ばせていただけることが数多くあります。ただ特に長期で活動をする場合、被災地域の方々にとってのボランティアの存在意義を考えることは大切だと感じています。被災地域のニーズや自分たちの活動頻度、強みなどを照らし合わせ、一番役に立てる形で活動することが望ましいと思います。私もできませんでしたが、もう少し活動内容を絞り、一番自分たちの長所と被災地域のニーズがマッチする活動を深掘りするのも選択肢としてあったような気がしました。

個人的な反省はありますが、活動を誠心誠意続けてくれた後輩の皆様、サポートして下さった大学職員の皆様、そして何よりはまぎくのつぼみを温かく受け入れてくださった宮古の皆様に感謝しております。

第3期 「はまぎくのつぼみ」での活動を振り返って

2017年度法学部卒 吉田 沙織

大学1年生の春、新入生ガイダンスで学内に東日本大震災の被災地支援団体があることを知り、生まれ育った岩手県に少しでも貢献したいとの思いで「はまぎくのつぼみ」に加入しました。団体の活動収束に当たり、代表を務めた2015年度の活動を振り返りたいと思います。



2015年度は、11名の新メンバーを迎え16人体制で活動を開始しました。新メンバー一人ひとりと話をした際、熱い思いを持って団体に加入したということを知り、震災から数年経過していても、東北出身ではなくても関心を持っている学生がいることに驚くとともに嬉しく思いました。その一方、バックグラウンドがそれぞれ異なる中で、団体としてのベクトルを合わせることの難しさにも直面し、毎週、試行錯誤しながらミーティングを行っていたことが印象深く心に残っています。

当時、活動先である宮古市では、災害公営住宅の整備に伴い応急仮設住宅からの転居が行われているところでした。団体設立時から応急仮設住宅の集会所で手芸や傾聴等により入居者と交流を行ってきた私たちは、活動場所や内容を見直す転換期に入り、何度もミーティングで今後の方向性について話し合いました。

また、被災地復興支援物産展においては、新たな取組を始めた年度となりました。従来は、学内のみでの開催でしたが、より多くの方に被災地の今を知ってもらいたいとの思いから商業施設（イオンモール多摩平の森）での物産展及び写真展の開催が実現しました。その他にも物産展で販売する商品を製造している企業を訪問してお話を伺ったり、リーフレットを作成したりと、メンバー間で意見を出し合いながら幅広く活動に取り組むことができました。学生の力だけでは達成できないようなことも、たくさんの方に御協力いただき挑戦することができました。「はまぎくのつぼみ」での経験や学びは、大学生活の中で最も大切な財産の一つとなっています。

大学卒業後、岩手県職員としてUターン就職をし、2020年度からは沿岸地域の産業振興に関する業務を担当しています。宮古市も所管区域となっており、学生時代から継続して沿岸地域の復旧・復興に携わっていることを大変ありがたく思っています。新型コロナウイルスの感染拡大が落ち着いた際には、一歩ずつ着実に前に進んでいる沿岸地域を多くの方に見ていただきたいです。

末筆ながら、「はまぎくのつぼみ」の活動に際して御尽力いただいた全ての皆様に厚く御礼申し上げます。

第4期 はまぎくのつぼみは個々人の中に生き続ける

2018年度商学部卒 田中 瑠海

晴れて大学生となった2015年の春、新しいことに挑戦したいという漠然とした理由からボランティアセンターを尋ねました。はまぎくのつぼみの活動に参加したことで、私自身が形成されたといっても過言ではありません。活動を振り返りながら、活動の収束を考えたいと思います。



被災地支援のモチベーション

私が初めて宮古市を訪れたのは2015年の夏でした。事前準備するにあたり、私はいわゆる被災地の情報を頭に入れて臨みました。実際に現場に行ってみると、事前情報はマクロ的で断片的な情報しか収集できず、一人一人に向き合うことでしか得られない情報がたくさんあるということでした。公営住宅にお住まいの方が参加する理由、社協で働く経緯、被災した工場を立て直す企業のモチベーション…各々の背景を知ることで、おこがましいかもしれませんが寄り添うことが可能になると思いました。はまぎくの活動を通して、様々な立場の方と接点が生まれることで、学生の私たちは課題を発見し解決に向けて行動できるのです。

参加する学生たちも多様性に富んでおり、はまぎくの活動の幅広さが多くの学生の参加を促したといっても過言ではありません。2016年の春には、30名近くの学生がはまぎくのつぼみに興味関心を持ち活動に参加してくれました。はまぎくを知った理由や参加動機は違えど、“宮古のためにできることを”という思いは共通認識だったので、課題を見つけて解決に向けて議論するスタイルは、規模が大きくなっても維持されたと思っています。

収束について

被災地支援のゴールは活動の収束ということは分かっていたものの、はまぎくの活動を閉じると聞いた時には動揺してしまいました。しかし、活動の収束という決断ははまぎくの今を活動する学生たちが考え抜いて出した結論だと認識しています。震災から10年が経過しましたが、宮古のことを考え抜き、宮古のために行動した時間は裏切りません。そして、個々人の中に宮古のことを想う気持ちは生き続けるでしょう。

結びに、はまぎくのつぼみに携わってくださった学生、大学の皆様、そして宮古の皆様に感謝申し上げます。

第5期 支え合うこと

2019年度総合政策学部卒 今野 陽介

はまぎくのつぼみ第5期（2017年度）の代表を務めさせていただいた今野陽介です。はまぎくの活動収束に際して、2017年度の活動や、その活動を通して感じたことを記します。

宮古での主な活動は、災害公営住宅でのコミュニティ支援と学童保育支援です。

コミュニティ支援では、郷土料理づくりや自作の宮古すごろくゲームなどで災害公営住宅にお住まいの方々と交流。少しでも楽しく過ごしてほしいという思いで皆さんと一緒に過ごしました。

2017年度からは地域の夏祭りにも参加。より地域の方々と交流を深めていきました。

学童保育支援では、さまざまなゲームを通して子供たちと遊び、学びました。大学生と触れ合う機会を作ることで、少しでも将来の選択肢を広げることができるのではないかと考えていました。

また、宮古市役所やさまざまな企業さんへのヒアリングを通して、学ばせていただく機会もたくさんありました。それらの学び・経験を生かし、年に4回ほど大学や都内の施設で物産展を開催し、宮古の商品を販売。販売を通して宮古のことを知っていただければという思いがありました。

宮古の方々、ボランティアセンターのスタッフ、顧問の先生方、活動を繋いでくれた先輩方、一緒に活動をしてくれた同期のみんな、活動を引き継いでくれた後輩たち、色んな方々の支えがあったからこそこれらの活動ができていました。なによりも、受け入れて下さった宮古の方々にはとても感謝しています。何をするのか、すべきなのか、大切なことは何なのか、とにかく同期のみんなとは常に話していたと思います。

岩手で過ごした学生時代が楽しく、忘れられず、「少しでも岩手に関わりたい、力になりたい」という恩返し思いから、はまぎくのつぼみに入りました。活動を通して、「恩返し」という堅苦しいことは関係なく、自然な気持ちで支え合うことが大事であると気付きました。そんな私も、現在は岩手で働いています。理由は岩手が好きだから。宮古にもたまに行く機会がありますし、宮古の商品をスーパーなどで見たら、自然と手に取ってしまいます。

はまぎくのつぼみの活動は収束とはなりますが、今までのメンバーも色んな形で自然と宮古と関わり続けると思いますし、宮古の方々への感謝の気持ちはずっと残ると思います。「ボランティア」という概念をこえて、「支え合う」ことの大切さと幸せを感じた4年間でした。1年生の活動の時の「またきてね」という言葉が忘れられません。今思えば、その一言があったからこそ、希望を持って宮古に行き続けていたと思います。

本当に色々な方に支えられて、支え合って活動を続けることができました。関わってくださった皆様、本当にありがとうございました。活動する学生たちが考え抜いて出した結論だと認識しています。震災から10年が経過しましたが、宮古のことを考え抜き、宮古のために行動した時間は裏切りません。そして、個々人の中に宮古のことを想う気持ちは生き続けるでしょう。

結びに、はまぎくのつぼみに携わってくださった学生、大学の皆様、そして宮古の皆様に感謝申し上げます。



第6期 はまぎくのつぼみの活動を通して

2020年度文学部卒 山本 高大

私は、はまぎくのつぼみの6期生として岩手県宮古市の被災地支援活動を行いました。私自身、東日本大震災で直接被害を受けたわけではありません。しかし、震災当時何もできなかったからこそ何かできることをしたいと思い、はまぎくのつぼみへ入りました。

活動内容としては、宮古市の企業訪問や市役所・消防本部での傾聴、学童保育支援、津軽石・鍬ヶ崎公民館でのコミュニティ支援、田老地区での防災ツアーへの参加、そして東京での物産展等です。

これらの活動を振り返って今感じるものが大きく分けて3つあります。

1つ目は、「相手の気持ちに寄り添うことの大切さ」です。公民館や学童での活動において、被災をしていない私が被災された方々と話す際、当然被災された方の辛さや悩みは私には分かりません。しかし、相手の話に真摯に耳を傾けて寄り添うことで、「話を聞いてもらえてよかった」と言っていただくことができました。私は現在、消防官として働いています。ゆえに、私が今後向かう場所は常に苦しい想いや辛い想いをした人がいるところなので、この寄り添う気持ちを忘れずに真摯な対応をしていきたいです。

2つ目に、「自然災害の恐ろしさを伝えていくことの大切さ」です。消防の世界に入って、東日本大震災時に緊急消防援助隊として被災地へ救助活動をしに行った方のお話を聞くことができました。その方は、母親が赤ちゃんを抱えながら亡くなっている姿を見て「なんで逃げなかったのか」と強く思ったとおっしゃっていました。きっと津波の恐ろしさを知っていれば逃げられて助かっていたと思います。だからこそ、私が活動を通じて学んだ津波などの自然災害の恐ろしさを伝えていく、そして備えておくことの大切さを多くの人に発信していきたいと思います。

3つ目は、「多くの人に支えられていた」ということです。これは、活動をしていた当時間も感じていたことではありますが、私だけでは決してこれらの活動を行うことはできなかったと思います。学生だけではどうしたらいいのか分からなくなった際に助言をくださったボラセンの方々や顧問の先生方、活動に関してアドバイスをくださった先輩方、そして一番近くで支え、協力してくれた6期のメンバーに感謝したいです。

最後になりますが、活動収束に際してこのような活動誌という振り返りの場を設けてくださり、誠にありがとうございました。



第7期 はまぎくのつぼみで得られた経験

商学部経営学科4年 榎本 由波

はじめに

私がボランティア活動を始めるきっかけになったのは、2011年の東日本大震災だったように思います。私は当時小学5年生で、学校の教室で震度5弱の揺れを経験しました。教室の引き戸が左右にガングンとぶつかって大きな音を立てていたのを覚えています。その後日常生活を送っている中でも当時の映像が頭の片隅に残っていましたが、特に行動を起こすことはできないままでした。

そんな中で大学に入学し、東日本大震災の復興支援活動を行っている団体があるということを知りました。私が入学した時点で既に震災からは7年が経過していましたが、そこで話を聞いているうちに「まだ私にできることがあるのならば現地の方々の力になりたい」と思うようになり、その団体に加入することを決意しました。



宮古市との出会い

「はまぎくのつぼみ」に所属した最初の夏休みに、私は初めて宮古市を訪れました。活動前のある程度町のことは学んだつもりでいましたが、実際に現地を歩いてみると新たな発見が多くあり、よりこの町を知りたいと思うようになりました。特に印象に残っているのは、田老地区で「学ぶ防災ツアー」というものに参加したことです。その地域は特に被害が大きく、町は巨大な防波堤を乗り越えるほどの津波によって壊滅状態に追い込まれました。そんな状況だった町並みが真新しい道路や建物によって大きく復興し、新たな町へと変貌を遂げていく様子を実際に見た際は、上手く言葉にできませんが、とても感動したのを覚えています。

再度の訪問

現地での経験を経て、より宮古市という地域のために活動したいという思いが強くなった私は代表を務める傍ら、春休み期間に「復興創生インターンシップ」に参加しました。これは復興庁主催のインターンシップで、宮古ブロックを含む東北3県の各企業のプロジェクトに取り組むものです。私にとってのこのインターンシップの一番の魅力は、現地に1か月半近く滞在することができる点でした。同じブロックの他企業のインターンシップに参加する学生たちと共同生活をしたこと、そして地元の方々とたくさん交流ができたことで、これまで遠い場所に感じていた宮古市が第二の故郷のように思えるようになりました。

終わりに

私は、大学生活の4年間で大きく成長できたと実感しています。その中心には間違いなくこのボランティア活動の経験があり、宮古市とのつながりがあったと思います。ボランティア活動・インターンシップ等でお世話になった皆様には本当に感謝しています。長い間ありがとうございました。

第8期 コロナ禍での活動

商学部会計学科3年 大内 尚人

活動収束の判断をした8期として、また私個人として活動を振り返りたいと思います。

私は、震災発生から8年が経過した2019年（入学当時）でも依然として、復興支援活動を行っているという点に興味を持ち、はまぎくのつぼみに加入しました。高校まで岩手県に住んでいたこともあり、県内のボランティアや復興支援活動が落ち着いてきた印象を持っていました。しかし、はまぎくのつぼみという団体が活動を続けていることをネット上で知り、これまで自分がしてきたボランティア活動とは異なる新しいことができるのではないかと思い、加入しました。



私たち8期としては、宮古市での活動は1年次の夏と春だけであり、コロナ禍では活動期間のほとんどの活動をオンラインで行いました。それまで、8期として集まる機会も少なく、メンバー内の統率が取れているとは言えない状況でのスタートでした。大学への入構規制があり、対面でのミーティングができないため、ZoomやLINEといったオンラインツールを用いることで団体としての方向性や意見の調整などを行いました。

2年次の夏活動では、宮古市の方々への手紙作成やアンケートと、企業様へのオンライン企業訪問といった新たな活動方式を取りました。それまで先輩方が築いてくださった“つながり”や思いなどが途絶えてしまうのではないかと不安になるときもありました。しかし、実際にオンライン交流やアンケート・手紙などによる活動をすることで、団体としてなすべきことや方向性を見つけることができましたし、アンケートのご回答やお手紙の返信をいただいたときは、メンバー全員が励まされました。活動している実感が持てない期間もありましたが、多くのご支援のおかげで止まることなく活動を続けることができました。

また、団体メンバーだけでなく、顧問の先生やボランティアセンターのスタッフの方々へのアドバイスなど多くの方々の支えによりこれまでの活動を行うことができました。宮古市での交流会から東京での物産展に至るまで、非常に多くの方々のご支援があったからこそ実現できたと実感しています。

はまぎくのつぼみとして活動したことは、私の大学生活においてかけがえのない経験の一つであると同時に、一個人としても成長できた時間でありました。団体としての活動が収束してしまうことに関しては、それが絶対に正しいか判断することは難しいと思います。しかし、活動が収束した後でも、個人レベルにおいても宮古市との関係を継続していくことに変わりはありません。

最後になりますが、この10年間の活動を通じてご尽力された先輩方・たくさんのご支援をいただいた顧問の先生・ボランティアセンターのスタッフの方々、そして私たちの活動に関わってくださった宮古市の方々に感謝申し上げます。長期間にわたり、本当にありがとうございました。

有志 震災を伝え続けることの大切さ

2016年度経済学部卒 大上 拓紘

私は2015年4月に中央大学へ編入学をしました。「はまぎくのつぼみ」を知ったのは大学のHPでした。岩手県宮古市出身の私は中央大学へ編入したら、必ず「はまぎくのつぼみ」に入りたいと思いました。震災当時、私は高校1年生で課外授業のため学校にいました。あと数時間遅ければ部活動が始まり、目の前の閉伊川でボートの練習をしており、命を落としていたでしょう。



被災者の目線から「はまぎくのつぼみ」で活動をし、特に大切だと強く感じたことがあります。それは「震災の経験を伝え続けていくこと」です。震災から日が経つにつれて人の記憶から消えていくことは普通です。東京で活動をしていると「東北は震災から復興したんだよね」と言われることがありました。毎年3月11日前後は震災の報道がされますが、それ以外で報道される機会が少ないので復興したのだと思う気持ちは分かります。だからこそ私たちは「震災の怖さ、減災の重要性、復興の現状」を伝えていかなければなりません。

卒業後、私はJR東日本に入社し、現在は列車の乗務員として働いています。宮古や釜石の沿岸へ向かう路線にも乗務をしているので復興の様子を常に見ています。「はまぎくのつぼみ」が活動を終了しても、私は被災地に近い場所で生活しているため情報を発信していかなければいけません。

最後になりますが、「はまぎくのつぼみ」に携わってくださった方々に本当に感謝しております。宮古市へのご支援ありがとうございました。

はまぎくのつぼみの活動収束に寄せて

2019年度文学部卒 平田 祐

私が活動において一番印象に残っているのは、2016年に宮古市を襲った台風10号の直後に訪れた夏の活動である。大好きな宮古の街が土砂にまみれた光景は、映像や伝聞でしか知らなかった津波の被害を想起させるものであり、改めて東日本大震災の被害の甚大さを痛感させられるものであった。また、当時は被災地支援団体として活動していたが、被災地という視点に縛られず現状の宮古に寄り添った活動を志す契機となる活動となった。



岩手県に縁もゆかりもない私が宮古のために少しでもできることをしたいと思い行動し続けることができたのは、宮古が大変魅力的な街であったこと、地域の方々に温かく受け入れてもらえたことが一番大きな理由である。しかし、それに加え、日々の活動を力強く支えてくださったボラセンや学生課（現・学生生活課）の皆さんと顧問の先生方、脈々とつながりを守り指導してくださった先輩方、真剣な想いと熱い行動力に溢れた同期や後輩たちの存在が大きかったように思う。卒業した今だからこそ、はまぎくだからできたことの多さと、それが有難く貴重な経験であったことを痛感している。活動を通して出会った人たちや岩手、宮古との繋がりを絶やさぬよう、日常の些細な接点を見逃さず大切に過ごしていきたい。

第4章 宮古市の方より

本章では宮古市で特に関わりの深かった方々にアンケート形式で回答をいただいたものを掲載いたします。

黒柳 茂雄さん

元宮古市社会福祉協議会職員
現弥富市社会福祉協議会職員



1、当団体の活動の印象をお聞かせください

(前置きになりますが、私は現在、愛知県にあります弥富市社会福祉協議会に在職していることをお伝えした上で…)

私が宮古市社会福祉協議会に在職していた頃は、主に宮古市での活動の窓口となり、活動先のコーディネートをさせてもらいました。当時から、活動に対する目的、活動内容、スケジュールなどが企画書にしっかり落とし込まれ、いつでも安心感がありました。

支援終了後は、学生の皆さんと意見交換などをさせてもらいました。常に「宮古のために何かできるか」を追及し続け、団体関係者だけでなく、地域住民の声に熱心に耳を傾ける姿勢がとても印象的でした。

また、ずっと思っていました、みんな予定がかなりタイトではありませんか(笑)。前日夜の夜行バスに乗り、睡眠不足な中、当日支援活動し、早い学生はその日の夜に再び東京へ…。もう少しゆっくりしていけばいいのに(笑)。フットワークの良さを改めて感じる部分でもありました。

2、他所から学生がボランティアに来ることに対して感じることや、学生ボランティアに対する意見がございましたらお聞かせください

誰かに言われて動くものではなく、学生が自ら考え、自分たちで計画して自発的に活動できることが一番の学びにつながるものだと考えます。当然、「地域のニーズに合わせることは大切なことかもしれませんが、私は学生ボランティアに関していえば、多少のエゴ(もちろん迷惑にならない程度ですが)があっても良いのかな、と思っています。その学生のやる気や想いが地域にとって感謝や思いやりに結びつくのではないのでしょうか。

また、わがままを言えば、この学生時代の復興支援活動やボランティア活動を機に、地域に貢献できる人になってほしいと願っています。貢献の仕方は様々です。就職を機になかなかボランティア活動や地域活動に参加する機会も減ってしまうかもしれませんが、復興に携わったまち、自分の故郷、お世話になった施設など、どんな形でも良いので自分のライフスタイルに合った地域活動へ関わり方を見つけてもらえるとより地域も人も豊かになっていくのではないかなと思います。

3、当団体の活動収束に対してご意見やご感想がございましたらお聞かせください

「活動収束の経緯について」を拝読させていただきました。復興支援活動については、当時在職させてもらっていた時も当時の学生と意見交換し、学生自身が様々な葛藤を感じながら支援活動に携わっていることを感じていました。それを考えると、ここ数年は、発災から時間が経過したことに加え、コロナウイルスによる活動制限によって、ますます活動意義について団体として自問自答することが増えたのではないかと思います。活動収束に対する心苦しきはあると思いますが、私はこの団体でできたつながりや成果が、今後の災害支援に大きく役に立つものだと思っています。「はまぎくのつぼみ」の由来のとおり、逆境に立ち向かったメンバーが成長し、災害のみならず、様々な分野で活躍してくれることを願っています。

最後に、宮古市のためにご尽力いただき、本当にありがとうございました。一区切りになりますが、私はこの活動が復興の中で大きな一助になったものだと感じています。ぜひこの経験を生かしてもらい、これからも歩み続けてください。

黒柳さんには活動初期から社協の担当者として、地域の方との交流時など様々な場面で活動にご協力いただきました。新しい職場に移動後にも関わらず、今回執筆を快く引き受けてくださいました。本当にありがとうございました。

中沢 果美さん

宮古市社会福祉協議会職員



1、当団体の活動の印象をお聞かせください

私が貴団体の活動に関わるようになった2018年ころは震災から時間も経ち、被災の有無に関わらない地域住民同士のつながり作りが重要な時期だったと記憶しています。あくまで被災者支援を目的として、仮設住宅や災害公営住宅のみで活動をしている団体も少なくない中、貴団体は当時から津軽石地区のお祭りや地域の公民館での交流会などを展開しており、地域の課題や住民さんのニーズに合ったとても良い活動だったと思います。

2、他所から学生がボランティアに来ることに対して感じることや、学生ボランティアに対する意見がございましたらお聞かせください

地域が良くなるためには、「よそ者・若者・バカ者」が必要だと言われます。外から来た人がその地域を客観的に見る、若く柔軟な発想や視点で地域を知る、一般的にはやらないようなユニークなことに取り組んでみる、これらの要素を学生さんは大いに果たしてくれる貴重な存在だと思っています。実際、はまぎくのつぼみの学生さんが何度も宮古に通ってくださり、その地域の魅力を伝える事で、「宮古も捨てたもんじゃない」「もう少し頑張ろう」と思えた住民さんも多いのではないのでしょうか。

3、当団体の活動収束に対してご意見やご感想がございましたらお聞かせください

個人的な望みを言えば、“被災”に限らず地域に根差した活動をしていた分、長期的に学生さんと住民さん両方にとって良い活動を継続・発展させていけたらと思っていました。震災から10年の節目ということもありますが、コロナが無かったら…コロナ禍で直接お別れすることもできず寂しく思っています。

ただ、住民さんにアンケートを取ったり、関係機関の話を聞いたり、団体として悩みに悩んでの決断だとお察しします。コロナ禍で学生生活もままならない中、それでも宮古のことを真剣に、誠実に考えてくれたメンバーの皆様、先生方、ここまで活動を継続して下さったOBOGの皆様、すべての方々に心から感謝いたします。

4、宮古市に来たら行ってほしい場所・お店など宮古市の魅力についてお聞かせください

チェーン店が少なく、個人経営の飲食店がとても多いのが魅力だと思います。地元食材を使った美味すぎるパスタ屋、メニューが1つしかないラーメン店、2回目で顔を覚えてくれる店主の定食屋、宮古の魚にこだわった居酒屋、、魅力的なお店が多いので、1度来ただけでは到底回りきれません。ぜひ何度も何度も足を運んでほしいです。

田老“三王岩”の雄大で迫力のある海が個人的には好きです。駐車場からも水平線が見渡せて十分良い景色ですが、階段を降りて行って下から三王岩を見上げることをおすすめします。

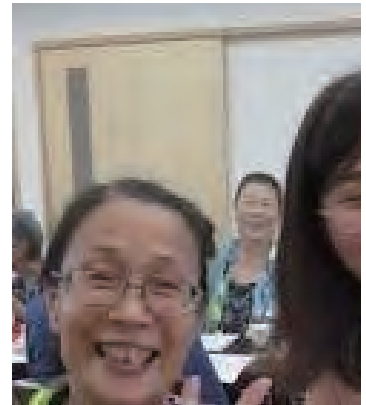
5、その他、当団体に対して何かコメントがございましたらご記入ください

直接会うことが難しい状況が続きますが、ふとしたときに宮古のことを思い出してもらえたら…とても嬉しいです。もし自由に移動できる世の中になったら、ぜひ宮古に遊びに来てください^^

中沢さんには、社協の担当者として地域の方との交流時などでお世話になった他、昨年度は津軽石公営住宅でのアンケートにご協力いただいたり、ヒアリングにご協力いただいたりと様々な活動でご協力いただきました。当団体の活動にご協力いただき本当にありがとうございました。



若江 美伊さん
津軽石公営住宅管理人



1、当団体の活動の印象をお聞かせください

一番印象に残ってますのは8月16日町内の祭りです。(16日仏様を送った後の)朝早くから町内の方々と一緒に準備、そして昼すぎからは郷土芸能(獅子舞)のお世話係(町内めぐり等のおひろめ)、帰ってからは公園でのパフォーマンス(たいこ、ソーラン踊り)又、地区の子供たちには「かき氷」「ポップコーン」などおかげさまで毎年静かなお盆16日は親子供楽しくいい16日でした。

あの日のにぎわいが想いだされます。盆おどりもしかり。
本当におおきに。そしておつかれさまでした。

2、他所から学生がボランティアに来ることに対して感じることや、学生ボランティアに対する意見がございましたらお聞かせください

他所の学生さんと会うまで本当に「きんちょう」するものです。住民同士の話し相手は私をはじめ後期高齢者は生徒さんたちに初めて会った時は「なんとまあ～世の中にこんな若くてキレイな人達がいる事」にオーと感嘆しました。

生徒さん達と話す事は私達にも刺激になり又、孫と話してるようで心和やかになりました。又パプリカ～?ダンスこれも又想定外でした。回転すしゲーム、タイル(カラフル)張?花瓶敷にしています。まだまだいっぱいありましたね。本当に心がやわらかになったひとときでした。ありがとうございました。皆さんの笑顔がステキでした。

3、当団体の活動収束に対してご意見やご感想がございましたらお聞かせください

長い間私達住民を心に掛けていただきありがとうございました。あの日から10年たち又この住宅での生活にも慣れ我家になっております。はまぎくのつぼみの会の皆さんには本当に色々な企画をしていただきこんな事あんな事を思い出しております。活動収束について心を痛めておられるようですが、どうかお気づかいなさらぬように。私達は感謝の気持ちでいっぱいです。

宮古も梅雨入りです。明けるともう夏です。皆さんお体大事に活躍して下さい。いつかお会いする事楽しみにしています。今までおおきに!!

4、宮古市に来たら行ってほしい場所・お店など宮古市の魅力についてお聞かせください

宮古魚菜市场

魚はもちろん魚市場に揚った物

※野菜は近在のお母さん達で作った物（コーナーがあり、個々の掛声があり宮古弁で楽しいものです）・田老“三王岩”の雄大で迫力のある海が個人的には好きです。駐車場からも水平線が見渡せて十分良い景色ですが、階段を降りて行って下から三王岩を見上げることをおすすめします。

若江さんには津軽石公営住宅の管理人として、交流会に毎回のようにご参加いただいた他、住民の方々の状況を教えてくださいなど、住民の方々と当団体の橋渡しをしてくださいました。活動へのご協力、本当にありがとうございました。



盛合 光成さん
元宮古市役所職員



1、当団体の活動の印象をお聞かせください

災害公営住宅の集会所での各種イベント、地域の祭への参加など、楽しかった思い出として話してくれる住民の方もいますので、皆さんの一生懸命に活動する姿勢が、多くの方に伝わったのだと思います。

物産展でのコラボ商品の販売は、広義の意味では確かに被災者支援だと思います。それまで、狭義の被災者支援しか考えることの無かった私にとって、そういう支援も有るのかと、とても新鮮でした。

2、他所から学生がボランティアに来ることにに対して感じることや、学生ボランティアに対する意見がございましたらお聞かせください

東日本大震災の被災地に限らず、地震、水害等の被災地では、家財の片付けや家からの泥出しなどボランティアに手伝ってもらい、とても助かったということをよく耳にします。

それゆえ、若い学生ボランティアは、多くの被災地で即戦力として大歓迎されるはずです。

もちろん、力仕事以外にも被災地には様々な場面でボランティアの需要がありますし、学生にとっても、普段、身を置くことがないような場で、それまで接したことがないような人たちと触れ合い、それらの人たちのニーズをくみ取り、主体的にボランティアとして活動することは、得難い経験をすることとなり、人生の大きな糧となると思います。

ただ、殆どの住宅が被災しているような地域においては、被災者は「普通の人」だけとは限りません。普段の社会にも存在する暴力的な方、順法意識に欠ける方など対応に留意すべき方も被災者として存在しています。

このことから、若い学生には、被災地の状況に圧倒され無防備になるのではなく、活動の対象となる方が、「普通の人」だけとは限らないということを十分に心に留めた上で、活動して欲しいと思います。

3、当団体の活動収束に対してご意見やご感想がございましたらお聞かせください

貴団体が被災地支援を標榜しているからには、いつか活動が終了を迎える時が来るのだろうと、漠然と思っていました。

また、最近「被災地支援の引き際」をいつ、どのようにするつもりでいるのかを少し心配していました。被災地支援の在り方は、何が正しく何が誤りかというような問題ではなく、様々な考えがあって当然ですので、そのような中で組織として被災地支援活動の収束を決断することは難しいであろうとも思っていました。

昨年から続くコロナ禍が、人と人との接触を困難にしている以上、貴団体の活動の大きな障害となったことは間違いのないと思います。そういう状況下で、活動の収束を表明されることは、団体のメンバーの方々にとっては不本意かもしれませんが、私としては、この時期の活動収束は妥当だと思います。

4、宮古市に来たら行ってほしい場所・お店など宮古市の魅力についてお聞かせください

本州四端で到達の難易度が最も高い（最低でも往復8キロのハイキングが必須）と言われる本州最東端の重茂半島の鮭ヶ崎（とどがさき）に行くと、本州最東端訪問証明書（有料）がもらえます。

「はまぎくのつぼみ」の皆さんは、ハードな日程での宮古市訪問が多かったので、訪問したことがある方はあまり無いと思いますが、太平洋の大きさを実感できる場所です。

5、その他、当団体に対して何かコメントがございましたらご記入ください

私が、貴団体とお付き合いするようになったのは、まだ、津波による被災の傷跡が生々しく残っている頃でした。私が中央大学の卒業生ということもあり、当時、勤務していた宮古市役所都市計画課に連絡をいただいたのが最初だったと記憶しています。

レンタカーの助手席と後部座席に乗せて、田老地区の破壊された防潮堤など、被災地を案内したことを覚えています。当時は、その後、支援活動が10年近く続くことも、メンバーがその時の10倍を超えるような大所帯になることも想像すらしていませんでした。

今回、団体の活動収束という報告をいただき、津軽石の拙宅にお迎えした方々のことを考えました。あの頃、同居する私の母は孫でも待つかのように、若い学生に手料理を振る舞い、話を聴いてもらえることを楽しみにしていました。母は、今でも当時の集合写真を居間に飾っています。

被災地で活動を始めようと最初に思い立ち、団体を立ち上げ、実際に行動に移された方は、本当に素晴らしいと思います。また、被災地で災害公営住宅の建設や高台への宅地の整備が進み、仮設住宅の住民が減少し、被災者のニーズも多様化していく中で、被災者のために役立ちたいと模索を続け、団体の活動を代々引き継いでこられた方々も立派だと思います。そして、被災地支援の在り方に悩み、議論し、活動の収束を決断して収束に向けた作業に取り組んでおられる方には、頭が下がります。

私は、中大OBの一人として、後輩の皆様を誇らしく思うとともに、宮古市の市民の一人として感謝しています。ありがとうございました。

盛合さんには活動初期より活動にご協力いただき、津軽石地区での活動時には毎回お世話になっておりました。活動にご協力いただき本当にありがとうございました。



早川 輝さん

NPO 法人みやっこベース



1、当団体の活動の印象をお聞かせください

メンバーの皆さんがとても真摯に宮古市、また宮古市民に向き合ってくれていたことを感じます。

当団体（みやっこベース）と合同で開催した学生交流会では、宮古で活動する他大学の学生と積極的に交流し、活動の幅を広げていたことが印象的です。

宮古で働く方をゲストに招いての企画では、とても熱心に話を聞き、質問をし、宮古やそこで暮らし働く人のことを知ろうとする意欲を感じました。

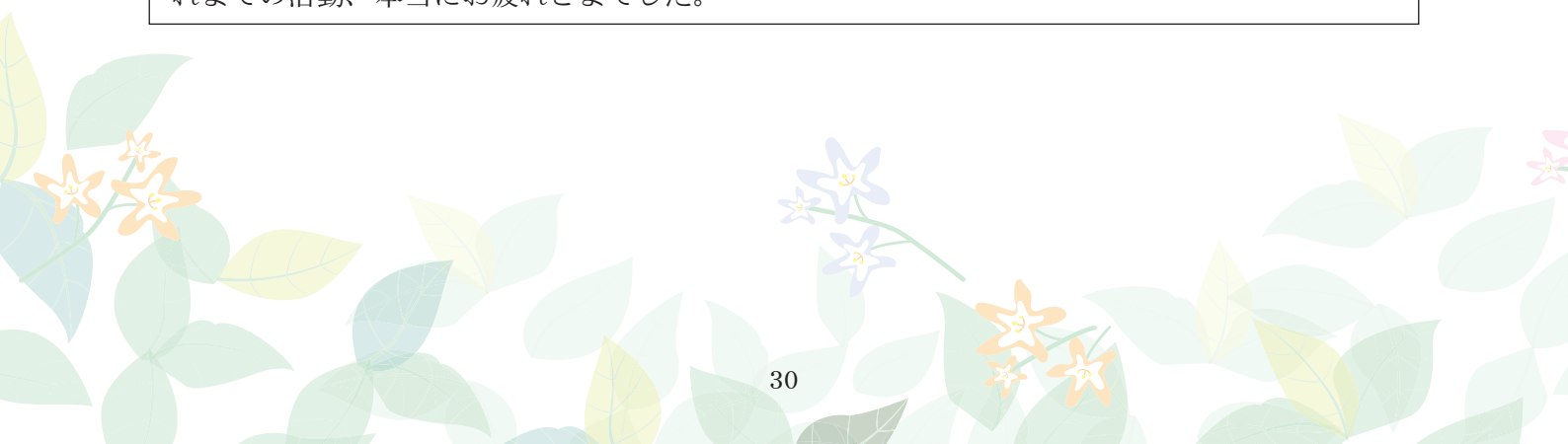
2、他所から学生がボランティアに来ることに対して感じることや、学生ボランティアに対する意見がございましたらお聞かせください

震災後、多くの学生ボランティアが宮古に来てくれました。大学生という存在が少ない宮古市において、市外県外から来る学生ボランティアの皆さんには、活動のみならず様々な面で力になってもらえたと思っています。特に継続的に宮古市を訪れ活動してくれていた皆さんには感謝しかありません。

一方で、宮古での活動の経験が学生ボランティアの皆さん自身の何かしらのプラスにつながってくれていることを願ってやみません。いつか、当時よりさらに成長した姿を見せて宮古市に来てくれたらとても嬉しいです。

3、当団体の活動収束に対してご意見やご感想がございましたらお聞かせください

震災から10年にわたって活動を続けたことに敬意を表します。先輩から後輩へと活動を引き継いでいくことには大きな苦労があったことと思います。それでも活動が継続されたのは「何のために活動するのか」という団体の理念があったからこそなのではないかと想像します。これまでの活動、本当にお疲れさまでした。



4、宮古市に来たら行ってほしい場所・お店など宮古市の魅力についてお聞かせください

宮古の魅力は、パンフレットに載っている有名な観光地だけではありません。
地元の方々と仲良くなることで、ディープでマニアックな地域の魅力を教えてくれるはずです。ゲストハウス 3710 で地元の方々と交流してくれたら嬉しいです。

5、その他、当団体に対して何かコメントがございましたらご記入ください

いつの日か皆さんがまた宮古を訪れてくれた時に、より良い宮古市になっているよう、宮古市民の私たちはこれからも活動を続けていきます。ぜひまた遊びに来てくださいね。

早川さんは宮古で様々なイベントを行われており、その中で企業さんとの橋渡し役や、他大学の学生との交流などにおいてご協力いただきました。活動にご協力いただきまして誠にありがとうございました。

第5章 収束と今後

1、収束について

2012年より活動を続けてまいりました「はまぎくのつぼみ」ですが、今年度をもちまして団体としての活動を収束することとなりました。

活動収束の経緯に関してですが、このような議題が上がったのはおよそ2年前になります。中央大学ボランティアセンターの方針として、学生団体としての活動内容と最終的な地点を見直す形となり、「収束」も含めて団体内での議論が行われました。継続派と収束派で意見が分かれており、信頼関係の持続という意見もあれば、学生の支援の範囲は有限であり、区切りをつけるべきであるとの意見もありました。当然私たちの議論だけで解決することは困難であることから、津軽石地区公営住宅の皆様アンケートのご協力をお願いいたしました。その結果として、復興よりもむしろコロナに対する不安が増加しているとのこと回答が多く見られました。総合的な面を考慮し、先が見えない状況の中で、団体理念である「つながりの創造」・「継続的支援」を達成するための役割を果たすことが困難であることから、活動を収束することになりました。

2、今後について

前述の通り、はまぎくのつぼみは活動を収束しますが、活動を収束したら全く宮古市と関わらなくなる、ということではありません。これまでの活動を通して宮古市の皆様と先輩方が築いてこられた信頼関係を大切に、次世代へと繋げていきたいという想いもあります。

また、東京から宮古市を訪れ続けることにも大きな意義があると思っております。今年度で団体としての活動は収束しますが、団体の元メンバー・現メンバーは今後も宮古市への関心を持ち続け、機会があれば是非訪問したいと考えています。

私たちは東京で過ごしている中でも、お店で宮古市の商品があれば目に留めたり、テレビで宮古市のことをとりあげていたりすると親近感が湧きます。自分たちにとってそんな存在の場所がこのボランティア活動を通して増えたことを、とても嬉しく思います。

宮古市の皆様と活動できた喜びを忘れず、またこの団体に所属して学んだことを糧にして歩んでまいります。活動の記憶はメンバー、一人一人の中にあり、それを今後も大切にしていきます。現在所属しているメンバーの想いを各章の最後に記載しております。

第7期および本章担当者より

法学部4年 小林 俊郎

はまぎくのつぼみの一員として、色々な経験をさせてもらい、本当に多くのことを学ばせていただきました。公民館・学童での交流会や企業訪問、都内での物産展等、それぞれの活動で新しい出会いや発見が度々ありました。ボランティアは人生で1度もしたことがありませんでしたが、この団体に入ってよかったと心から思っています。団体は収束することになりましたが、個人的にもう一度いつの日か宮古市に足を運びたいと思っています。最後になりますが、ボランティアセンターの皆様、顧問の先生方、歴代の先輩方、同期のみんな、後輩の皆さん、そして私達の活動を支えて下さった宮古市の皆様、本当にありがとうございました。



法学部4年 中野 数章

これまで、はまぎくの活動を温かく見守って下さり、ありがとうございました。団体を畳むことになりましたが、宮古の方々の力に少しでもなれていたら幸いです。私は心残りが2つあります。1つ目は、元気をいただいていたのは自分達だったことです。宮古の方々への感謝と同時に、もっと宮古に貢献できたのではないかという悔しさがあります。2つ目は、最後会うことなく団体を畳むことです。このご時世、致し方ないことではありますが、とても残念です。団体としての活動は終わりますが、個々人の活動も終了する訳ではありません。宮古に赴ける日が到来次第、再び訪れ自分にできることを行いたいと思います。



法学部4年 吉田 圭佑

現地での傾聴活動や学童支援、公民館支援、東京での物産展におけるご当地商品の販売など様々な面から岩手県宮古市と関わらせて頂くことができ、貴重な経験ができました。私は、特にみやこラボのメンバーとしてコラボ商品の企画に力を入れました。物産展や学園祭で沢山商品が売ることができました。



法学部 4年 中村 有里

東日本大震災の後、「復興に向けて」というフレーズを何度も聞いた。テレビで瓦礫が撤去される様子や、建物や道路が整備されていくのを見て、復興が進んでいるのだと私も感じていた。しかし、はまぎくのつぼみとして活動をする中で「復興とは何か」という疑問を投げかけられたことがあった。ヒアリング活動では復興はもう終わったと考える人もいれば、まだ道半ばであると感じている人もいた。私はこれまで多用されてきた「復興」の言葉が、とても曖昧なものであったことを知った。何かをしたら復興は達成される、と明確に定義することは難しい。私たちの活動は収束するが、画一的な復興の終わりが無いことは忘れないようにしたい。



法学部 4年 菱田 朱衣梨

より多くの楽しさと幸せを、作り、共有するにはどうするのがよいだろうか。築かれた大切なものをもっと良いことへとつなげていきたいと、迷いながら、思うようにできずに自分の未熟さに落ち込んだことも少なくありません。

ただ、この活動を通じて出会えた皆さんがあたたかいから、ボランティアの感想としては心許なくて恐縮ですが、私は幸せでした。

私の中にこのボランティア活動で得たものが残るように、つながることのできた方の心に「はまぎくのつぼみ」があったらいいなと願って、その中にもし、私と同じ思い出があるのならば、本当に嬉しいです。

はまぎくのつぼみで出会えた全ての方へ、心からの感謝とともに、ご多幸を願い続けます。



経済学部 4年 鈴木 海渡

2020年2月にイオンモールで行った他大学とのトークセッションに参加したことが記憶に残っています。そこで、団体についての紹介や震災から10年目を迎えるにあたって団体に残していきたいことなどについて議論しました。加えて、コラボ商品であるドーナツの販売イベントについて宣伝をすることもできました。議論を経て、他大学の方も今後の活動について同じような悩みを抱えていることを知り、話し合うことで共有することができました。そして、人前で代表として発表するという良い経験をする事ができたと考えます。



商学部4年 三浦航侑

はまぎくのつぼみでの活動は本当に宮古市の方々の温かみを感じることが多かったです。私が初めて津軽石の夏祭りへ参加させていただいた際、他所から来たにも関わらずとても優しく向かい入れていただき、明るく話しかけてくれました。それだけでなく泊まる場所まで提供してもらい、お手伝いに参加させていただいたのにこちらが感謝することがとても多かったです。また、企業訪問では、お忙しいにもかかわらずお時間をとってお話をいただき、私達の質問にも丁寧に答えてくださいました。



はまぎくのつぼみの活動では宮古市の魅力を知るだけでなく、現地の方々の温かみまでしっかりと感じる事が本当に多くてとても良い経験をさせていただきました。

法学部3年 松尾進司

私ははまぎくのつぼみにおける活動を通じて、理解を深められたことが2つありました。

1つ目は、震災当時における現地の方々の心境についてです。私は活動前において、震災当時の状況の詳細に関しては理解できていなかったと思います。しかし、実際に宮古の方々の話をお聞きして、経営の危機や地域の復興進捗度における格差など、様々な苦悩があったことが分かりました。



2つ目は行動についてです。これは、「他人」のために自ら行動するという意味です。これを体現できたのは宮古での夏祭りと物産展における販売です。夏祭りでは準備などで常に何かできることはないかを意識し、物産展では商品紹介を積極的に行い、その結果多くの商品を販売することができました。

私は宮古での活動を通じて大きく成長することができました。ここで経験したことをこれからの人生に役立てていきたいと思っています。

文学部 3年 松本 奈子

活動を通して、この団体に入っていなければ私の大学生活で関わる機会の無かった方々にお会いすることが出来ました。ご自身のお話を聞かせていただいたこと、現地のことを紹介していただいたこと、私の大学生活において大切な経験の一つとなりました。

誰もが予想していなかったコロナウイルスの流行で、それ以降現地へ足を運ぶことができなくなったのは残念でした。1年生の時に現地へ行った際に経験したことを踏まえて、より深い活動を2年生以降もおこないたかったなと思います。活動収束をお伝えしたときには、現地の方々から今までの活動の感謝と大学生活へのエールを沢山頂き、とても嬉しかったです。

現地で感じたことや、メンバーとのミーティングで悩んだ経験など、上手く行ったことだけでなく、反省点も含めて、この団体に所属して得たことを心に留め、残りの大学生活を送りたいと思います。ありがとうございました。



文学部 3年 本多 裕香

私がボランティア活動に参加したきっかけは、誰かの役に立ちたいという思いからでした。はまぎくのつぼみの活動では、現地の方々の思いに応えられたときの喜びや感謝されることの喜びを感じるとともに、思いだけではどうしようもない現地の状況の変化に沿ったボランティアの難しさを体感しました。

そして活動を通して「人のために何かをする」という事以上に、自分自身が多くのことを学ぶことができ、一つ一つがとても貴重な経験となりました。

大学生生活の中で宮古市の方々や仲間に出会えて嬉しく思います。ありがとうございました。



第6章 先生方より

顧問として私たちの活動にご協力いただいた小室先生、吉野先生、山科先生と、コーディネーターとして私たちの活動をサポートしていただいたボランティアセンターの開澤さんからコメントをいただきました。

逆境に立ち向かった「はまぎく」への感謝

法学部教授 小室 夕里

岩手にも支援に入ってもらえないだろうか。卒業生の声に応える形で「はまぎくのつぼみ」は誕生しました。2012年5月に、当時学生課にいらした工藤課長と豊田さんと3人で宮古市の社協を訪れ、お話を伺った時のメモには次のようにあります。

一番心に残った一言は、社協の方が、この夏の活動が鍵になると説明してくださった時のことば。「冬を越える元気を夏に蓄えてもらいたい。夏、外に出ないで引き籠っている人は、冬になったらもつと外に出ない。」大学生の若者パワーを炸裂させてもらわなくては。

「若者パワーを炸裂させてもらわなくては。」とは、なんと勝手な。しかしながら、多くの学生さんが、たくさんの元気を届けてくれました。立ち上げメンバーの石山さんと赤木さん、そして、その後様々に状況が変化する中、花言葉の通りに逆境に立ち向かい、活動を支えてこられた学生のみなさんに心より感謝申し上げます。

話を繋いだ立場上、顧問となった私を学生と同じようにご指導くださった中澤先生、途中から一緒に顧問を務めてくださった吉野先生と山科先生、コーディネーターのみなさま、職員さん、どうもありがとうございました。はまぎくの花言葉には「友愛」もあります。



つながりを切らさず

文学部教授 吉野 朋美

つながりの創造——この素晴らしい理念をもとに活動する「はまぎくのつぼみ」にかかわったのは設立3年目、特別研究を取得された小室先生の代理で一年、顧問を務めたのがきっかけです。書類を拝見・捺印するのが主な仕事だったのですが、その時の代表・吉田沙織さんが東京の物産展で売る宮古の特産を持って現地や活動の様子を熱心に話に来てくださるのを聞いているうちに、私も実際に宮古に行ってみたい！もっと活動を知りたいと思い、そのまま顧問の端っこに加えていただいていた。

宮古には夏に二度しか行けませんでした。企業・市役所訪問、公民館での集い、学童やお祭



りのお手伝いと、宮古の多くの方々に支えていただいております活動の一端を目の当たりにできたのは懐かしい思い出です。そこでは、はまぎくの皆さんが確かに宮古の皆さんとのつながりを、また宮古の方同士をつなぐ創造していました。

コロナ禍で宮古に行けないまま収束することは、卒業生にも在学生にもつらい決断だと思います。でも、創造したつながりを切らさず、宮古とかかわり続けてください。私もまた必ず訪れます。活動をありがとう。

ミーティングの思い出

文学部教授 山科 満

2016年から顧問に加わった私は、宮古で学生さんと行動を共にしたのはたった2回だけです。それはそれで心温まる思い出なのですが、私にとって「はまぎくをつぼみ」とは、大学で学生さんたちと繰り返したミーティングに他なりません。毎回5～7人の学生がどこかの部屋に集い、「何を話してもよい、ただし他人の発言には反論しない」という条件で、90分喋るだけの会を、何回も主催しました。一番たくさん参加したのは、5期生の〇〇さんだったかな……。最後の2年間は、あまりに忙しくなり何もできませんでした、ごめんなさい。



当時もそれなりに多くの仕事を抱えていたけど、ミーティングの時間は、私として組織運営のための煩雑な（時には不毛な）業務の狭間にある、ただ楽しくすごせるひとときでした。学生さんそれぞれの個性の一端に触れるたびに、何て素敵な若者なんだろうと思ひ、50代後半に至っても成熟とはほど遠い我が身を省みることばかりでした。たくさんのかたを話し、教えてくれて、ありがとう。

私は、野田村に限らず、岩手の人たちには「70までは通います」と機会がある度に公言してきました。きっと、レンタカーで峠越えができなくなるまで、岩手には通い続けるのだらうと思ひます。宮古にもまた行くことになるのでしょう。その度に、「はまぎくをつぼみ」のことを思い出し、温かな気持ちになるに違いありません。みなさんの前途に幸多きことをお祈りします。

これからも逆境に強いはまぎくのように…

ボランティアセンター コーディネーター 開澤 裕美

私は2015年4月からボランティアセンターに着任したため、3期生の吉田さん時代から学生に近い位置で関わらせてもらいました。学生と宮古の皆さんとの交流を間近で見させてもらうことができ、それはそれはとても幸せな7年間でした。

「はまぎく」の花は、それは白く可憐でありながら、耐寒性耐暑性どちらも強く、まさに逆境に強い花です。「はまぎくのとつぼみ」も大震災から始まり、1期生から8期生まで色々な逆境があったことでしょう。でもそのたびに、皆で知恵を出し合い、悩みながらも前に進んでいった学生の皆さんに、心から敬意を表します。

特に「団体を収束する」という大きな決断に至った8期を中心とする現役生の皆さん。先輩から代々受け継いできた熱い想い、現地の方々との温かい繋がり、それを自分たちの代で途切れさせてしまうことになって良いのかと、随分悩みましたね。コロナ禍のため、現地へ赴けた回数は多くなかったと思いますが、ボランティアの在り方について、コミュニティについて、様々なことをたくさん議論し話し合い、皆で出したこの結論は、とても重く尊いものだと思います。

これまで長らく活動を行うことができたのは、多くの方々の協力と支援があったことに他なりません。いつも笑顔で学生を受け入れてくださった宮古の皆様、財政面で支えてくださった助成団体の皆様、顧問の先生方、関係者の皆様に心からの感謝を申し上げます。ありがとうございました。



第7章 宮古について

1、宮古マップ

今まではまぎくのつぼみメンバーが訪れたことのある場所をピックアップしました

出典：岩手県宮古市 - Yahoo! 地図



拡大



〈おすすめの食べ物〉

①宮古駅から北側

・「割烹 おかめ」

瓶ドンがおすすめ！プリプリの海鮮が絶品 住所：宮古市末広町 1-18（宮古駅から徒歩5分ほど）



↑割烹おかめさん



↑蛇の目本店さん

・「蛇の目本店」

美味しい海の幸をふんだんに堪能できる！ 住所：宮古市栄町 2-8（宮古駅から徒歩1分ほど）

・「井の店おいかわ 宮古魚菜市場店」

イクラ、マグロ、イカ、サーモンがたっぷり乗った海鮮丼がおすすめ！

住所：宮古市五月町 1-1 宮古魚菜市場内（宮古駅から徒歩10分ほど）



↑井の店おいかわさん



↑川俣さん

・「川俣」

天ぷらや鍋物、お刺身などが美味しいお店。ウナギもいただけます！

住所：宮古市大通 1-4-11（宮古駅から徒歩5分ほど）

②宮古駅から南側

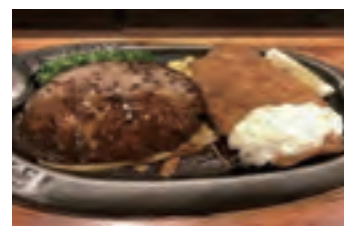
・「トマト&オニオン宮古店」

「王子のぜいたく至福のタラフライ & ハンバーグ」は宮古店限定。

サクフワ食感がおいしい！

住所：宮古市宮町 1-37-17（宮古駅から徒歩5分ほど）

他にも美味しいものがたくさんあるので是非はまぎくのつぼみのInstagramをご覧ください！ @chuo.hamagiku



〈お世話になった皆様〉

詳細は企業紹介の部分をご覧ください

- ③ 「古須賀商店」
- ④ 「津田時計写真店」
- ⑤ 「ホテル近江屋」
- ⑥ 「かけあしの会」
- ⑦ 「共和水産」
- ⑧ 「フードパック」
- ⑨ 「Art Eriy's」
- ⑩ 「花坂印刷」
- ⑪ 「save iwate」
- ⑫ 「田中菓子舗」
- ⑬ 「有限会社すがた」
- ⑭ 「津軽石公民館」・「津軽石学童」

お祭りなどのイベントの手伝いをさせていただきました！
ソーラン節などのパフォーマンスはいかがだったでしょうか？



- ⑮ 「鍛ヶ崎学童」・「鍛ヶ崎公民館」

〈足を運んだ場所〉

⑯浄土ヶ浜

海がみられるエメラルドグリーンの絶景。サッパ船に乗って眺める青の洞窟の神秘的な光景も素敵。

食事も美味しくおすすめ！カモメに餌やりもできる。



⑰ゲストハウス 3710

夏活動の際にお世話になった宿泊施設。共有スペースがあるためいろいろな人と交流が可能。

詳しくはゲストハウス 3710 の HP をご覧ください。

住所：宮古市末広町 4-6



⑱たろう観光ホテル

学ぶ防災ガイドで訪れた。大津波の破壊力を感じることができる。

住所：宮古市田老野原 80-1



2、企業・商品紹介

私たちが物産展で扱わせていただいた商品や、訪問した企業様について紹介します。詳細は各企業様のHP、Twitter、Instagramなどをご覧ください。

<古須賀商店>

古須賀商店は宮古市で、魚介類等を加工・製造販売されている創業 70 年を超える老舗であり、特に海藻を用いた商品を作っています。



・茎わかめの生姜漬け

三陸のわかめを使用し、口に入れると生姜の食感と共に磯の香りが漂う、ご飯に合う商品です。



古舘 誠司さん

はまぎくの会の皆さんには商品として「茎わかめ生姜漬け」を取り扱っていただきました、水産加工業をしています古須賀商店です。「はまぎくのつぼみ」の団体の皆さんには、東日本大震災の被災状況やら復興・復旧状況やら平成 28 年の台風 10 号での被災状況やらいろいろな災害のお話をさせていただきました。

これまで携わってきた団体のメンバーの皆さん、ご苦労様でした。また、団体の活動を収束するに至ったメンバーの皆さん断腸の思いであったと察します。「はまぎくのつぼみ」は収束しますが、皆さんで「はまぎくの花」を咲かせ明るい社会にしていってください。



<津田時計写真店>

田老地区で時計や写真などを扱うお店です。

毎年企業訪問で震災時のお話を聞かせていただきました。



<ホテル近江屋>

宮古市にあるホテルで、部屋からは宮古港を一望し、食事は三陸海岸のおいしい魚などをいただくことができます。



<かけあしの会>

三陸地方の商品を多く販売しており、浄土ヶ浜など様々な場所でイベントも開催しています。



・塩麴クッキー

三陸の塩と水を使用した商品で、細かく砕かれたアーモンドの風味もよく、甘さ控えめでとてもおいしいクッキーです。



菅原 則夫さん

はまぎくのつぼみの皆様、震災直後から今まで長い間、大変お世話になりました。

弊社の商品を仕入れ販売、そして関東でのイベントにも参加していただき笑顔での販売応援に心強く大変助かりました。

そして、想いを寄せ、被災地宮古に足を運び、こちらの現状を受け止め活動する若い皆さんのパワーにたくさんの元気をいただきました。

毎年メンバーが変わっても皆さんが変わらぬ想いで10年もの長きご支援に感謝致します。今後の皆様の個々の活躍に期待しています。本当にありがとうございました



<共和水産>

水産加工を営んでおり、特にイカやタラを使った商品が有名です。また、専務の方は「イカ王子」として宮古を盛り上げています。



<フードパック>

宮古市で水産加工業を主に行われており、自社商品のみならずPB商品やOEM商品も製造する幅広い販売を行っています。

また、近年は水産加工だけにこだわらない新しい分野にもチャレンジしています。



・たつっと浜だれ

たつっとは宮古の方言で「少量」という意味で、ホタテやカニの旨味を凝縮したたれが様々な料理に使える万能調味料です。



< Art Eriy's >

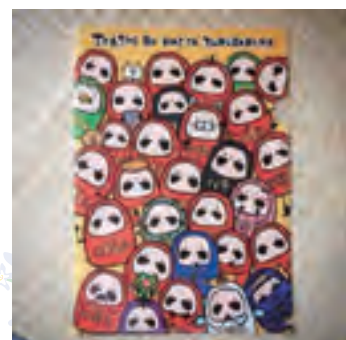
イラストを使って宮古の独自のお土産を作っています。

また、贈り物としての似顔絵などのイラスト・絵画やデザインの依頼も受ける幅広い事業を行っています。



・クリアファイル

Art Eriy'sさん作のキャラクターである「やませくん」や「だるま」など、様々なかわいいイラストの描かれたクリアファイルです。



盛岩 幸恵さん

「はまぎくのつぼみ」の皆さんには、Art Eriy's のグッズ販売をして頂きまして、誠にありがとうございました。震災後は、たくさんの「ボランティア」の方たちにたくさん支えられ、今があります。

しかし、いつまでも被災者でいてはいけない、と考へ、ここ最近では、震災を伝えたり、知ってもらったり、防災に繋げてもらう活動を行っています。また機会がありましたら、是非宮古に遊びに来てくださいね。



<花坂印刷>

宮古市で印刷業を営み、共和水産のイカ王子らと共に様々な事業も行っています。



<田中菓子舗>

宮古市田老地区で大正 12 年創業の地元の方に愛されるお菓子屋で、和菓子から洋菓子まで豊富な種類を製造しています。



・田老かりんとう

渦巻き模様の形が特徴で、一般的なかりんとうに比べ生地も薄くカリッとした食感で食べやすい。甘すぎず、手間ひまかけた素朴な味わいのかりんとうです。



田中 和七さん

あの日、店舗工場兼自宅全て失いながらも、工場、自宅、店舗の順に再建を果たしてきました。10年が過ぎ、人口流出による生産量と売上の減少は大きな痛手です。元には戻らない現状に気弱になることがあります。そんな時、学生さんの来訪は前に進む原動力になります。

当店では、主力商品うず巻き模様の「田老かりんとう」の他に、手練り白あんを詰めた「はまぎく最中」も人気です。袋の裏には花ことば「逆境に立ち向かう」が記されています。

「はまぎくのつぼみ」さんからは、「チュー王子」とはまぎくをデザインしたシールを作成していただき、焼きドーナツの袋に貼り販売していただきました。ご支援ありがとうございました。ぜひ、また来て下さい。



<有限会社すがた>

創業 130 年の老舗で、宮古名物のまごいかせんべいやいかせんべいなどの商品を扱っています。



・まごいかせんべい、いかせんべい

まごいかせんべいやいかせんべいは、岩手県産の小麦粉と宮古の海からとれる塩、三陸産のスルメイカを使用しているというこだわりを持つせんべいです。



3、参考資料

メディア掲載情報

日付	情報誌	掲載内容
2012年	白門中央	いつまでも寄り添う心で 被災地支援と中大ボランティア
2016年2月6日	読売新聞	イオン物産展パネル展
2016年8月6日	岩手日報	ボランティア参加学生紹介
2016年9月26日	河北新報	ボランティア参加学生紹介
2017年3月	宮古市社会福祉協議会／ほっとすまいる	ボランティア参加学生紹介
2017年5月	蛍雪時代	中央大 被災者支援学生団体 岩手県で交流会を開催
2017年7月	草のみどり	被災地支援活動振り返り
2017年10月27日	岩手日報	学長×学生 対談 被災地支援ボランティアを通して自ら考え、成長する中大生たち。
2017年12月27日	岩手日報	被災者と憩いのひととき 宮古で中央大生 フォトフレーム作り
2018年1月25日	中央大学学員時報	活動学生からのコメント
2018年9月17日	岩手日報	宮古の「今」学び発信 中央大学生団体・はまぎくのつぼみ 東京
2018年	中央大学新聞	被災地ボランティア 中大生もあの日を忘れない



↑活動収束を伝えたところ宮古市長様からいただいた感謝状

本章担当者より

経済学部3年 小玉 竜大

はまぎくのつぼみとしての活動を約一年しかまともに行うことができませんでしたが、一年生の夏ボラで行った腹帯祭りや様々な体験、ホームカミングデーや学校での物産展など貴重な経験を積むことができ、はまぎくのつぼみとして活動することができて良かったと思いました。



文学部3年 飯塚 健美

はじめに、現地で温かく迎えてくださった皆様、協力して下さった皆様、本当にありがとうございました。はまぎくのつぼみの活動で、改めて気持ちについて考え直すことができました。私自身大きな被害にあったことはなく、震災についてテレビやインターネットで調べて知った気になっていましたが、活動の中で現地の方と交流することによって、それはただ上辺のことだけだと痛感しました。「頑張って」の言葉が人を傷つけるなんて考えてもいませんでした。自分の言いたいことを言うのではなく相手がどう感じているのか耳を傾けることが重要なのだと気づくことができました。このような機会を授けてくださった全ての方にご健勝とご多幸をお祈り申し上げます。



終章 終わりに

8期生の私たちが活動の中心となった2020年度は、新型コロナウイルスの影響により多くの活動が制限され、屋外でのイベントや宮古市の方々との繋がりを大切にしてきた私たちにとって非常に厳しいものとなりました。そのような状況の中で夏のボランティア活動や今後の活動の方向性などをオンラインミーティングで話し合い、最終的に活動の代替案として、オンライン企業訪問やアンケートを現地の方々の協力のもと実施することができました。その後の話し合いで活動の収束が決まりましたが、復興が完全に達成されたとは言えない状態での収束は、大変心苦しさを感じます。

これまでのすべての活動において、ボランティアとは人とのつながりや協力があってこそ行えるものであり、また、どのような場面においても「手伝わせてもらっている」というスタンスで行動することが大切だと強く感じました。また、はまぎくのつぼみでの様々なご縁で繋がった皆様と築き上げたものや活動はこれからも私たちの生活の中で生きていくと思います。「宮古市」は間違いなく私たちにとって特別な場所となりました。

最後になりますが、本誌の作成及び弊団体の活動に対し、宮古市の方々をはじめ、先生方やOG・OBなど多くの方々にご協力いただきました。ご協力いただいた皆様に改めまして感謝申し上げます。誠に有難うございました。

中央大学ボランティアセンター公認学生団体「はまぎくのつぼみ」一同

はまぎくのつぼみ活動全史
～宮古市との10年間の軌跡～

2022年2月発行

発行元

中央大学ボランティアセンター

公認学生団体「はまぎくのつぼみ」

〒192-0393 東京都八王子市東中野742-1

Tell : 042-674-3487

Twitter : @chuomiyako

Instagram : @chuo.hamagiku

HP : <https://www.chuo-u.ac.jp/usr/volunteer/>

Email : chuo.hamagiku@gmail.com

